

「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」
推進校実施報告書

- 1 学校名：広島県立大崎海星高等学校
- 2 実施日時：2018（平成30）年12月19日（水）14：00-15：00
- 3 対象：生徒約80名（全校）
- 4 派遣オリンピック： 宮下 純一 さん
（競泳 北京大会出場）

5 授業内容：講演

2018（平成30）年12月19日（水）に、広島県立大崎海星高等学校にて、競泳の宮下純一さんの講演が行われました。

「出会いに感謝 思い続けたオリンピック」というテーマで行われた講演において、宮下さんは、自身が水泳を始めてオリンピックに出場するまでの経験を振り返りながら、生徒達がこれから生きていくうえで大切だと考えることをお話しされました。

まず始めに、宮下さんが北京オリンピック出場を決めた選考レースと北京オリンピックのメドレーリレーの決勝のレースの映像を元に、自己紹介をされました。さらに、そのレースで獲得した銅メダルを見せながら、北京オリンピックのメダルが中国の特産品である翡翠を組み合わせたものであることを紹介されました。

続いて、競泳を始めてからオリンピックに出場するまでの経験についてのお話がありました。宮下さんは、元々トップスイマーではありませんでした。しかし、様々な人との出会いによってオリンピックに出場するまで競泳を続けることができました。最初の出会いは、幼稚園の先生でした。シャンプーハットをしなければお風呂にも入れないくらい水嫌いだった小さい頃の宮下さんは、幼稚園のプールの時間も1人でプールサイドで水着にも着替えずに座っていました。しかし、幼稚園の先生が親に「小学校ではプールの授業があるから水泳を習わせてあげてほしい」とアドバイスをしてくれたことでスイミングスクールに通うようになりました。こうして水泳を始めることになった宮下さんは、水嫌いは克服しましたが、練習は嫌いでした。それでも10歳のときには全国大会に出場するなど、記録が出るようになり少しずつ水泳が好きになっていきました。このように記録が伸びる一方で、中学生になると毎日の練習のせいでこれまで一緒に遊んでいた友人が気を使って遊びに誘ってこなくなり、水泳が嫌いになっていきました。このような状況で、本気で水泳をやめようと考えていた宮下さんが水泳を諦めずに続けることができたきっかけが恩師との出会いでした。体育の先生であったその恩師は、水泳部の顧問であったわけではないが、体育教官室で頻りに話をする仲でした。そして、水泳を続けるか悩んでいた宮下さんは「水泳がやりたくなってきた」と相談をすると、「嫌ならやめたらよい」と言われて衝撃を受けました。そこで「何でそんなことを言うのか」と聞き返すと、「お前を目指して頑張っている人がいるのにそんなことを言って恥ずかしくないのか」と言われました。宮下さんは、さらに「先生には僕の気持ちはわからないんだよ」と言うと、「壁は越えられる人に訪れる、俺はお前の超えるところを見たい」という返答がありました。恩師とのこれらのやりとりを通して、恩師の期待に応えたいと思った宮下さんは「オリンピックでメダルを獲り

たい」と強く思うようになりました。こうしてオリンピック出場を目標にした宮下さんでしたが、大学進学をめぐって岐路に立たされました。大学進学を悩んでいた宮下さんでしたが、その迷いは宮下さんのお父さんのアドバイスで吹っ切れました。宮下さんのお父さんは、悩む宮下さんに対して「迷っても最後は自分で決める、自分で決めた道なら挫折しても納得できる」と言いました。この言葉で宮下さんは吹っ切れ、北京オリンピック代表まで上り詰め、メドレーリレーで銅メダルを獲得するに至りました。

質疑応答では、生徒から、スランプの乗り越え方について質問がありました。宮下さんは、目標を改めて明確にすることで乗り越えることができる、と伝えられました。

最後に、代表生徒から感謝の言葉が送られて、集合写真をとって散会となりました。

講演全体を通して、宮下さんは生徒との意見交換を積極的に促しており、講演の最後には生徒達の笑顔が溢れ教室がとても温かい雰囲気になっていました。また、講演の運営が生徒主体で行われており、生徒の主体的な関わりが見られました。

6 授業の様子



【 生徒による宮下さんの紹介 】



【 映像 】



【 メダルの提示 】



【 講演 】



【 質疑応答 】



【 代表生徒の挨拶 】